

【審査論文】

今なぜ国立移民博物館なのか —— イタリアのナショナル・アイデンティティの現在

秦泉寺友紀

The Actualitiy of Museo Nazionale Emigrazione Italiana and Italian National Identity

Yuki SHINSENJI

要旨

本稿は、イタリア統一150周年記念事業の一環として設立された「国立移民博物館」を手がかりとして、イタリアのナショナル・アイデンティティの現状について検討する。この博物館はイタリアの過去の送り出し移民の本国および移民先の社会への貢献を評価し、その規模の大きさにもかかわらず学校の教科書でもほとんど扱われてこなかった彼らを想起し、イタリア史のなかに位置づけ直すことを企図した施設である。他方、1990年代以降、急速に移民受け入れ国へと姿を変えた現在のイタリアでは、移民排斥的な主張を掲げる政党への支持も一定の広がりをもつ。こうした背景のもと、国立移民博物館には、イタリアがかつて移民の送り出し国であった過去やイタリア移民の労苦を想起し、それを踏まえて今イタリアに外国から到来する移民に向き合うよう方向づける役割も期待されている。しかしこの博物館にみられる移民のルーツに重きをおく態度は、新たにイタリアに定住する外国からの移民を「イタリア人」の枠の外に位置づけるそれと地続きの部分もないわけではない。こうした両義的な移民博物館のあり方は、移民受け入れに揺れる現在のイタリアを象徴している。

キーワード：イタリア、ナショナル・アイデンティティ、国立移民博物館、移民の想起

Italy, national identity, national museum of Italian emigration, memories of emigration

1. 本稿の課題

イタリア統一150周年を2年後に控えた2009年10月、ローマの歴史的な中心地区に「イタリア国立移民博物館」(Museo Nazionale Emigrazione Italiana / 以下MEI)が開館した。イタリア以外の国々に目を向けても、1990年代以降、ニューヨークのエリス島移民博物館(1990年)、ブエノスアイレスの国立移民博物館(1997年)、パリの国立移民歴史博物館(2007年)をはじめ、世界各地で移民に関する博物館の開館が相次いでいる。こうした移民博物館の流行の背景には、グローバル化にともない国境を越えた人の移動が活発化するなかで、移民の存在感が増し、彼らへの関心が高まりをみせていることがあるだろう。イタリアにおけるMEIの開館もそうした流れのなかに位置づけられる。

MEIに関しては、その開館が統一150周年記念事業の一環であったことも目をひく。19世紀半ばのイタリア統一時の有力政治家の発言とされる「イタリアはできた、これからはイタリア人をつくらなければな

らない」という言葉が、実際には出所が定かではないにもかかわらず、同時代、またその後のイタリアの社会状況を言い表した言葉として流布してきたことが示すように、イタリアはネーション・ビルディングやナショナル・アイデンティティの不確かさが間断なく指摘され、それが特徴として語られてきた社会である¹。たとえば北部を拠点とする地域主義政党から出発した北部同盟（Lega Nord）は、1990年代、「イタリア」という国家の正当性に異議を唱え、北部の分離独立を主張して支持を拡大した。統一150周年の2011年前後にも歴史家ジェンティーレの『国家でもネーションでもなく——目標を欠くイタリア人』や、同じく歴史家ギンズバーグの『イタリアを救おう』など、ナショナルな共同性としてのイタリアを問い直す本が相次いで刊行され、イタリアがいかなるネーションなのか、またそもそもイタリアが果たしてネーションたり得るのが論じられた。

このようなイタリアの社会的文脈に照らすと、「イタリア」というネーションの由来が改めて問い直される統一150周年という節目に想起すべき対象として位置づけられたのが移民であったことの意味、またそれがいかなる意味づけで想起されたのかが、問われるべき問いとして浮上する。MEIが設置されたローマ中心部のヴィットリアーノは、イタリア王国の初代国王ヴィットリオ・エマヌエーレ2世（1820-1878）を記念するため統一50周年の1911年に完成した建造物で、第一次大戦後の1921年には戦没者を顕彰する「無名戦士の墓」が、1970年にはイタリア統一に関するリソルジメント中央博物館が設置されている。また、近年は共和国記念日に行われるパレードのコースにもなるなど、ヴィットリアーノは近現代のイタリアにとって象徴的な意味をもつ²。MEIがこのヴィットリアーノに設置されたことは、現在のイタリアが移民に重要な意味づけを付そうとしていることのあらわれといえよう。



ヴィットリアーノ
（ヴィットリオ・エマヌエーレ2世記念堂）
MEI入口は向かって右側にある

本稿は、MEIを手がかりに、イタリアのナショナル・アイデンティティをめぐる現状について検討する試みである。まずはMEI開館にいたる経緯を振り返り、次にMEIの展示内容を検証する。そして最後に、現在のイタリアでMEIを通してかつての送り出し移民を想起することが、イタリアのナショナル・アイデンティティにいかなる意味をもつのかを考える。こうした問題設定の背景には、特に21世紀以降のイタリアでは外国からやってくる受け入れ移民が社会的関心を集めている状況がある。MEIが開館した2009年のEUの世論調査ユーロバロメーターの報告書では、「今後EUを強化するため、EU諸組織はどの分野を重視すべきだと考えるか」との設問に対し、「移民」と回答したイタリア人は、「経済」（37％／第一位）に次ぐ30％と高い割合を占めたこともそのあらわれといえよう³。そうしたなかで、あえて過去の送り出し移民を想起することがもつ意味に、ナショナル・アイデンティティという観点から光を当てるのが本稿の課題である。

2. MEI開館にいたる経緯

MEIの開館は、プローディ中道左派政権下の2007年、12月24日法律第244号第70条2項に基づく通達で決定した。博物館設置に向けた動きの中心となったのは外務省で、管轄も外務省が担当し、国立博物館を多く管轄する文化財・文化活動・観光省は協力という位置づけにある。

当時イタリアの「移民研究センター（CSER）」の長で、後述するMEIの学術委員会のメンバーを務めた

プレンチペ（Lorenzo Prencipe）によれば、MEI設立の後押しとなったのは、ひとつには、イタリア人移民の子孫たちから寄せられていた、自らの先祖のイタリアへの貢献を訴える声であった。2000年には、外務省の主催で在外イタリア人を集めての「世界のイタリア人会議」が開かれ、在外イタリア人コミュニティがイタリアにとっての資源であることが確認された。ローマで開催されたこの会議については、MEIの展示区画「世界のイタリア人、イタリアのなかの世界」でも紹介されている。さらに2000年代初めのイタリアでは、在外イタリア人の投票制度の導入（2001年）や外務省による在外イタリア人コミュニティ向けのオンラインニュースレター「イタリアとのネットワーク（*In rete con Italia*）」の発信開始（2003年）など、在外イタリア人やイタリアにルーツをもつ人々との接点を維持しようとする動きが相次いでいた⁴。また、2000年以降は、地域に特化した移民博物館が1年に2施設のペースで開館するなど、送り出し移民を想起する動きも、国内各地で活発化していた（Prencipe 2013：612）。

2007年に設置が決まったMEIではあるが、翌年の2008年に中道左派プローディ政権から中道右派ベルルスコーニ政権への政権交代が生じると、設置にかかる予算の割当額が半額に減額され、予算執行の決定も2009年3月にまでずれ込んだ。その結果、MEIは約半年の準備期間で開館した。展示内容については、外務省政務官（当時）のマンティーカ（Alfredo Mantica）下院議員（「国民同盟」所属／当時）を委員長とし、国内各地の移民博物館や研究センターの長、イタリア地理学会長ら有識者のほか、外務省在外イタリア人・移民政策局長らによって構成される学術委員会が計画を担った。コーディネーターとして学術委員会のメンバーでもあった上掲のプレンチペによれば、学術委員会では「移民（*emigrazione*）博物館は、送出・受入の両方の移民（*emigrazione/immigrazione*）に関する博物館であるべきだ」との意見が出されたが、受け入れ移民に関する展示の調整には「単純に政治的な理由により」困難があったという（Prencipe 2013：619）。最終的には、MEIは、開館に寄せた当時の文化財・文化活動大臣のコメントが端的に言い表すように「遠くから、今日あるわれわれをつくるのに貢献したイタリア人に捧げられる」性格の強いものとなった（Ministero degli Affari esteri 2009：31）。

移民をテーマとする国立の博物館はイタリアではMEIが初めてだが、国内各地にはMEI以前から、移民に関する多様な施設が存在する。これらの多くは、当該の地域出身で外国に渡った移民に関する資料を備えた施設で、MEIのホームページではMEIに協力した県やコムーネ（日本の市町村に相当）の範囲での移民博物館・資料館や研究センターは全国で32館にのぼると紹介している。これら一連の施設は、移民送り出しが局地的な現象ではなかったこと、移民がこれまで地域的なつながりのなかで想起されてきたことを示す。こうした背景のもと設立されたMEIでは、外務大臣の通達における設置目的でも、地域（ローカル、リージョナル）によって異なる移民のリアリティを示すこと、海外だけでなく国内の移民博物館との連携も掲げられている⁵。このことは、イタリアにおける移民がナショナルなレベルに一元的に還元されない現象と捉えられていることを示す。

2009年10月23日、MEIはナポリターノ大統領（当時）、フィーニ下院議長（当時）、ボンディ文化大臣（当時）、外務省政務官（当時）のマンティーカ（Alfredo Mantica）下院議員（「国民同盟」所属／当時）出席のもと開館した。MEIへの年間来場者は現在約100万人にのぼる。1997年に夜間のライトアップが開始され、2007年には展望台が設置されるなど、ヴィットリアーノの観光地化が進んでいることに加え、入館料は無料、カンピドーリオ広場側の入館しやすい位置に入口があるという好条件はあるものの、同じくヴィットリアーノ内にあるリソルジメント中央博物館入館者が年間65万～85万人であることに照らしても、MEIの集客は良好といえよう⁶。

統一150周年の記念事業の一環であったMEIは当初、2011年12月までの期間限定の開館予定だったが、

その期限後も予算が組まれ、2013年10月3日には、中道右派の議員を中心に、下院に博物館の常設化のための法案が提出され、2015年夏現在も、ヴィットリアーノ内に設置されている⁷。

3. MEIの構成／内容

MEI設立に関する外務省の通達では、MEIの目的は「万人が移民について、歴史的プロフィールについてであれ、社会的観点からであれ、深く考える手段を提供し、我が国の移民経験の記憶を回復させる」ことと掲げられている。MEI開館時のスピーチで、外務省政務官のマンティーカ下院議員は、移民はこれまで「学校の教科書でも数行しか触れられず」、「イタリア国民のセリエB（「格下」の意）扱い」をされてきたと述べた。そうしたなかであって、MEIに託された役割は、移民を再びイタリア国民のなかに位置づけることであった。展示は、移民の歴史を時系列的に追う構成で、①イタリア移民の起源統一前～1875、②大衆移民1876～1915、③2つの大戦間の移民1916～1945、④第二次大戦後の移民1946～1976、⑤世界のイタリア人、イタリアにおける世界／1977～今日までの5つの区画からなる。



ヴィットリアーノ内の MEI 入口

MEIの展示は、予算やスペース上の制約もあるためか、静的な展示物が大半を占める。具体的には、移民の生活に関わる多種多様な写真や絵葉書、トランクや時計など私的な持ち物のほか、祭りなどで使用された移動式の音楽器具、炭鉱夫の作業着や道具類、世界各地のイタリア人コミュニティで発行されていた雑誌・パンフレット類、多岐にわたる公的な書類などである。また国営放送RAIによる移民の記録・ドキュメンタリー映像の複数のモニターや、移民に関する著名なルポルタージュの音読音声流れるブースなどのほか、移民がモチーフとなった1876年から1915年にかけての流行歌（「さらばナポリ」「明日、乗船したなら」等）の音声流され、最も多くの移民が送り出された当時の社会のイメージを喚起している。また、展示品に関する理解を助ける解説パネルも、多くがイタリア語と英語の二言語で配置されている。以下、MEIの展示の流れを追ひ、MEIにおける移民の想起のあり方をみていく。

入口を入ってすぐのMEIの展示全体のプロローグ的な空間には、RAIによる移民に関する映像のモニターが据えられ、その斜め前にはナポリターノ前大統領の2008年3月のスピーチを一部抜粋したパネルがある。それはかつてイタリアから多くの移民が渡ったチリ訪問時のスピーチで、多数のイタリア人が「経済的危機や社会的困難」により外国に移民した過去に言及し、「移民先からの送金はイタリアの発展に少なからず貢献」した一方、移民が「しばしば困難な生活を送った」と振り返り、しかし「彼らの労働文化や信じていた価値は、受け入れ国への政治的、社会的、経済的統合を助けた」としている。ナショナル・アイデンティティの不確かさが間断なく指摘されてきたイタリアという文脈を考えると、イタリアを離れた移民がイタリアの発展に貢献した存在と評価されるとともに、移民のホスト社会への統合の要因が、ホスト社会のあり方よりも先に、「イタリア人」の「労働文化や価値意識」に見いだされ、イタリアという共同性が措定されているのが注目される。

続く「イタリア史の不可欠な部分である移民」と題されたパネルはMEIの位置づけに関するもので、MEIは「過去、現在、未来において、イタリア人であると感じること、イタリア人であることについて考える機会を与える」施設であり、「外国のイタリア人」というアイデンティティを持つに至り、同時に

「苦勞しながらホスト国への統合プロセス」を歩んだ「2900万人の移民」の「記憶の場」とであると位置づけられている。加えてパネルの後半部分では、MEI設置に関する外務省の通達では触れられていない要素として、MEIが「今日の移民によってなされている挑戦に向き合うのを助ける機関」となり、「異なったルーツ、経験をもつ人々の共通の経験を若い人に示すこと」をめざすともうたっている。MEIを、過ぎ去った過去を保管するだけでなく、現在のイタリアが直面する課題に対応する施設として位置づけるこの部分は、先にあげた学術委員会での議論を反映したものと考えられる。

総論的な説明に続く最初の展示区画「イタリア移民の起源」は、時系列的にもっとも古い時期を扱っている。ここでは中世にさかのぼるイタリアのヒトの移動の歴史に触れた後、19世紀半ばの統一前後にすでに一定の規模で広がりを見せていた移民現象、地域によって異なる移民先（イタリア中部・北部4州を流れるポー川流域の平原地域からはフランス、ベルギーへ、北部のヴェネト地方やフリウリ地方からはラテンアメリカへなど）や移民の形態（短期／長期）とその背景（移民の目的が短期の出稼ぎか、自分で所有する農地を求めてか等）、1888年と1901年のイタリア国内の移民法に関する説明や当時のイタリア政府の移民への対応、高い乳幼児死亡率や低い識字率などに触れつつ、当時のイタリアの全般的に困難な社会状況をまとめている。

続く2番目の展示区画、「大衆移民1876～1915」は、史上最多の約1400万人が移民した大衆移民の時代に関する、MEIで最も充実した区画で、移民の経験が、移民仲介業者の役割、移民先への船の出航を待つ期間に滞在する「移民宿」(albergo emigrati)、到着から入国、移民先での労働（炭鉱、建設現場、ガラス工場等）といった具体的な観点から、多くの写真や移民の持ち物などとともに紹介されている。



MEI 館内の様子

またここでは、イタリア移民がさらされた拒絶や差別に関する展示もあり、深刻な事例として、1891年3月のニューオリンズでのイタリア人11名殺害（「イタリア人による警官殺しへの抗議」が「2万人規模で発生」）、1893年8月のフランスのエーグモルトでのイタリア人11名殺害（「フランス人の職を『盗む』」として「イタリア人への集団的暴力が発生」、「適正な裁判も行われなかった」）、1896年8月、「スイス人の執拗な攻撃からイタリア人を逃がすため」、チューリッヒで「特別列車が仕立てられた」事件、1897年7月のルイジアナでのイタリア人5名殺害（被害者のイタリア人が「黒人に親切に接し過ぎたことがとがめられ争いとなったことがきっかけ」）の4件が簡潔に紹介され、こうした事件の由来をホスト社会のイタリア人差別や外国人嫌いに帰している。

おもにピエモンテ出身の男性が短期の塩田労働者として出稼ぎに出ていたエーグモルトで発生した事件は、現代フランス最大のポグロム事件として、フランスの移民史家ノワリエルの著書『イタリア人虐殺』で検証されている⁸。同書では行方不明者も含めた事件発生当日と翌日のイタリア人犠牲者の数をフランス議会の資料をもとに22名としているが（Noiriel 2010＝209-210）、MEIの見積もりはそれより控えめである。またノワリエルの著書で触れられている事件後の展開——伊仏関係が戦争すら危ぶまれるほど悪化し、事態の沈静化をはかるため、両国政府は事件をうやむやにしたという——への言及はなく、イタリア移民が自国の政府からもしばしば見放されたことは後景に退いている。

その後には、「徐々に進む統合——故郷との絆とホスト社会への仲間入りとのあいだで」と題されたパ

ネルが続き、イタリア移民が移民先の社会に根を下ろしていったさまを紹介している。ここでは学校、宗教、アソシエーション、出版、住宅の各分野が取り上げられ、ブラジルやスイス、エジプトなど世界各地のイタリア人学校の集合写真（ダンテ・アリギエーリによる成人学校のものも一部含む）も展示されている⁹。たとえばアルゼンチンには1891年時点で215ものイタリア移民によるアソシエーションが存在したという。一連の写真のイタリア移民の姿は、経済的余裕を感じさせないものが多いが、なかには正装の男女100名余りが写ったアメリカの「イタリア人コミュニティ」の晩餐会の写真、オーストラリアの戸建の自宅前で家族写真などのような社会的上昇をうかがわせる例もある。これらに加え、イタリア・コミュニティ向けの多数の出版物は、移民たちのあいだでイタリアという紐帯が意味を失ってはいなかったことを物語っている。

さらに3番目の展示区画「両大戦間の移民1916～1945」では、第一次大戦により一時的に移民送り出しは減少し、イタリア兵となるため移民先から帰国する若者たちもいたものの、彼らは「アメリカ人」などによそ者扱いされ、戦後は彼らの多くが再び移民に出たとされている。こうした事例は、移民がイタリア内で国民の「セリエB」扱いされていたことの証左ともいえよう。さらに第一次大戦後には移民の送り出しが増加に転じたこと、ファシズム期には従来のような一般的な外国への移民が否定的に語られ、国内の工業地帯や植民地への移民が推奨されたこと、しかし特に後者に関しては、貧困にあえぐ農村においても、ファシスト体制が期待していたようには国内、植民地とも移民の成果はなかったこと、また一般的な外国への移民が抑制された一方、1938～41年にかけては40万人の労働者が同盟国ドイツに派遣されたこと、ファシスト体制から逃れるための外国への移民、アルカポネやラッキー・ルチアーノなどアメリカのイタリア移民の犯罪者や、そこから派生したイタリア移民の「犯罪者」イメージについて紹介されている¹⁰。

続く4番目の展示区画「第二次大戦後の移民1946～1976」では、戦争で破壊された戦後のイタリアには十分な仕事がなく、政府は1946年から48年にかけてフランスやベルギー、チェコスロヴァキア、スウェーデン、イギリス、スイス、オランダなどの国々、さらにアルゼンチンやブラジル、ウルグアイなどヨーロッパ外の国々と相次いで二国間協定を締結し、再び多数の人々が移民に出たこと、さらにこうした正規のルートの枠外でアルプスや海を越えた人々は1876年以降で400万人を超えるとみられること、1950年代末から60年代にかけてイタリアが復興・発展をとげるなか、主として南部から北部への国内移民が活発化したこと、しかし全体としてみれば外国への移民現象は続き、送り出し移民数と受け入れ移民数のバランスが転換したのは1973年であったことなどが示される。また、イタリア移民が外国で担った炭鉱労働の様子が、ゆかりの品々のほか、ベルギーなどで発生した炭鉱事故を報じる新聞紙面などとともに紹介されている。1956年のシャルルロワの事故が最大だが、それ以外にも含めると、ベルギーの炭鉱事故でのイタリア人死者は867人（1946～1963年）に及ぶとの解説は、イタリア人の炭鉱労働の過酷さを物語る。

5番目の展示区画「1977～2005／世界のイタリア人、イタリアにおける世界」はMEIの最後の区画である。ここではおもに1973年に送り出し移民数と受け入れ移民数のバランスが転換してから後のことが扱われ、イタリアに到来する移民に関する説明が加わる。ただしメインはあくまでも送り出し移民であ



MEI 館内の様子（炭鉱夫の道具類の展示）

り、2008年現在、在外イタリア人は373.4万人に及び、うち約3分の1は外国生まれのイタリア人であることが示される。さらに在外イタリア人登録制度（A.I.R.E.）の導入（1988年）やMEI開館を後押ししたイタリア移民の子孫たちを招いての「世界のイタリア人会議」と「世界のイタリア人青年会議」の開催（2000年／2008年）、新たなタイプの移動としての留学の増加（外国へ留学する2006年の学生数は2001年比53.2%増）などに関する解説が続く¹¹。また世界各地のイタリア人アソシエーションを検索できる端末（国名と活動分野を選択すると該当するアソシエーション一覧が表示される）では、イタリア人やイタリアにルーツもつ人々の世界的なネットワークの広がりを知ることでもある。

近年のイタリアで社会的関心を集めているイタリアに到来する移民に関する情報は、MEIの最後のパネルでようやく扱われる。そこでは、受け入れ移民の変遷が、マルテッリ法（1990年）からボッシ・フィーニ法（2002年）にいたる国内の法律の変遷などとあわせて説明される¹²。具体的には、1970～80年代の移民は、農業や漁業分野でのチュニジア男性、家事分野でのフィリピンやエリトリア、カーポヴェルデ、ソマリア等の女性が主であったこと、外国からの移民は1990年代以降に急激に増え、1996年にはイタリア在住の外国人は100万人を突破、2009年時点は389万人、全人口の6.5%を占めることが、その国籍の内訳や滞在資格の内訳とともに示される。また難民や国際結婚についても触れられ、最後に移民第二世代の登場が指摘される。そして学校で学ぶ彼らイタリア育ちの児童生徒たちには、「皮膚の色と宗教的ルーツ以外」は「イタリア人生徒と差がない」とされ、説明が締めくくられている。

最後の解説パネルに隣接するスペースには、MEI最後の展示としてイタリア在住の外国人とみられる人々の人物写真のパネル52枚が並んでいる。その写真のなかには、子どもにスポーツを教えるアフリカ系とみられる男性、高齢者に手を貸す東欧系とみられる女性など、イタリアでの生活をうかがわせるものもある一方、人物のアップ写真で、それだけでは彼らがなぜイタリアにいるのかといった背景が読み取りにくい写真も多い。これらの写真には、NPO団体「今日の移民（Immigrazione Oggi）」の「“マルチエスニックなイタリア”のアイデンティティと文化の写真コンテスト」の入選作品との情報はあるものの、コンテストの主催団体の紹介や撮影者、被写体のコメント等も含め、個々の写真に関する説明は一切なく、MEIのこの展示に限っていうならば、その解釈は来館者本人にほぼゆだねられているといってよい¹³。解説パネルとの対応関係がより明確で、個々の説明も添えられている他の展示品と比較すると、最後の写真パネルの展示は異質なものといえる。



最後の展示の写真パネル

4. MEIとイタリアのナショナル・アイデンティティ

外務省の通達で掲げられたMEIの目的は、統一150周年という節目に「我が国の移民経験の記憶を回復させる」ことにあった。これまでみてきたようなMEIの展示は、移民の歴史にさまざまな角度から光を当て、それを立体的に描き出すことに成功しているといえよう。その内容を簡潔にまとめるとすれば、かつてのイタリアの困難な経済的・社会的状況を背景に大量に送り出された移民は、世界各地で過酷な労働を担い、イタリアという出自による差別にさらされながらも、故郷への送金によって縁者ひいてはイタリアの発展を支え、同時に移民先の社会の発展に貢献し、個々の出身地域をこえたイタリアという紐帯を築き

支え合ったといったことに集約できるだろう。MEIは、このように再構成した移民の歴史をイタリア国外で展開したイタリア国民の歴史として提示している。

MEI開館時のフラッティーニ（Franco Frattini）外務大臣（「フォルツァ・イタリア」所属／当時）のコメントは、こうしたMEIのあり方を端的に示す。すなわち外務省発行のMEIのカatalogの冒頭で、フラッティーニ外務大臣（当時）は、「移民の経験」は「『外国のイタリア人』という共有されたアイデンティティ」をもたらし、「イタリアのアイデンティティの定義プロセスに貢献した」として、「移民を軽視するイタリア史は不完全な歴史」であると述べた（Ministero degli Affari esteri 2009：29）。外務大臣の次にコメントが掲載されているボンディ（Sandro Bondi）文化財・文化活動大臣（「フォルツァ・イタリア」所属／当時）も、かつてイタリアから外国に渡った人々は、「世界にイタリアの文化や価値を普及させ、目的地の国の経済的、社会的、文化的生活の発展に貢献」した、こうした「移民の経験」は「ナショナル・アイデンティティの根本的要素」であると述べ、かつての移民をイタリアというナショナルな共同性において捉えている（Ministero degli Affari esteri 2009：31）。

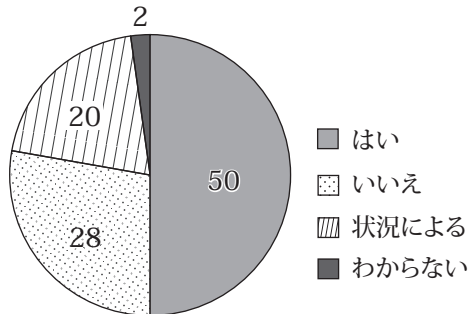
しかし、移民の歴史をイタリア国民の歴史として描くことは、移民現象を国民の物語のみに回収し、そこからこぼれ落ちる要素を捨象することと背中合わせでもある。たとえば、展示区画ごとに示される移民の送出数と受入（含帰国）数のバランスシートは、各時期の移民の規模を明確に示す一方、現実には存在した移民の地域的な多様性を平均にならし、イタリアというナショナルなレベルの現象として仕立ててしまう面もある。移民の出身地がしばしば付された展示品も、地域ごとに異なる文脈への言及が少ないため、前提知識なしにその意味を読み取るのは難しい。現状のMEIにはそうした展示はないが、約500ページからなるMEIのカatalogには、移民についてからアブルッツォからヴェネトまで20の地域ごとに解説した章が設けられ、イタリアの既存の移民研究が地域ごとに蓄積されてきたことにも言及している。MEIのニコシア（Alessandro Nicosia）館長は、「多様性と統一」をイタリアの根本的構成要素としてあげているが（Ministero degli Affari esteri 2009：40）、カatalogに付された移民を地域別に解説した章は、個別の地域を仔細にみていくと、その集積を超えた意味で全国レベルといえる現象が捉え難く、しかし全国レベルの現象として析出しようとすれば、ともすると地域の多様性が捨象されるというジレンマ、「多様性と統一」のあいだの複雑なバランスを示唆する。

また、MEIでは、外務省の通達であげられている過去の送り出し移民の想起とは別に、1990年代以降の移民受け入れ国への変化を背景に、「異なったルーツ、経験をもつ人々の共通の経験を若い人に示」し、「今日の移民によってなされている挑戦に向き合うのを助ける機関」となるという目的も掲げていた。すなわちMEIは、かつてのイタリア移民の経験を人々に想起させることを通し、現在のイタリアに暮らす移民への想像力を働かせる仕掛けとなることもめざしている。MEIの展示で描き出される、生活の糧を得るのが困難な状況のもと、半ば押し出されるようにイタリアを出て慣れない外国で暮らしたイタリア移民の経験は、現在のイタリアの受け入れ移民のそれを彷彿とさせる。さらにMEIでは、イタリア移民が経験した困難が、貧困や過酷な労働それ自体だけではなく、出自による差別に由来するものとして描き出されている。イタリア人という出自によって「犯罪者」とみなされ、働くことすら現地人の「仕事を盗む」とさげすまれた、現代のイタリア人からすれば理不尽なものと映るであろう過去を知ることが、移民受け入れ国となった現在のイタリアが、外国からの移民にどう向き合うべきかを考えるうえで、一定の意味をもつといえよう。

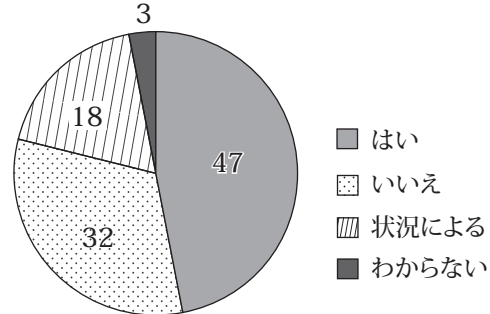
他方、MEIが開館した2009年のユーロバロメーターの国別年次レポートでは、「異なるエスニック・グループの人々はイタリアの不安定さの原因となる」、「異なるエスニック・グループの人々はイタリアの失

業を増やす」という、外国からの移民に関わる2つの見方への見解を問うた調査のイタリアの結果は、次ページの図のようになっている¹⁴。

異なるエスニック・グループの人々は
イタリアの不安定さの原因となる



異なるエスニック・グループの人々は
イタリアの失業を増やす



2009年のユーロバロメーターの国別年次レポートより筆者作成

異なるエスニック・グループの人々に対するイタリア人の見解

この調査結果によれば、「異なるエスニック・グループの人々」を「イタリアの不安定さの原因」や「失業を増やす」存在とは捉えない見方、すなわち「いいえ」の回答は、いずれも3割程度にとどまる。その一方、それに反対する、すなわち「異なるエスニック・グループの人々」を「イタリアの不安定さの原因」や「失業を増やす」存在とみなす、「はい」の回答は約5割を占める。2割程度を占める「状況による」との回答は、移民に対する必ずしも否定的ではない方向に向かう可能性もある一方、「状況」によっては、移民を「イタリア社会の不安定」要因、「失業」を増やす要因とみなす、移民排斥的な方向に向かう可能性もある。こうした現在の受け入れ移民に対するイタリアのまなざしは、かつてイタリア移民が外国の移民先で直面したそれと重なるようにもみえる。

直近の受け入れ移民に関する展示は、MEIの準備段階で学術委員会でも議論されたところであり、結果としてMEIの受け入れ移民に関する展示はわずかなものとなった。さらにその内容に関しても、たとえば最後の展示パネルで示される「皮膚の色と宗教的ルーツ以外」、移民第二世代の生徒とイタリア人生徒には「差がない」といった理解は、現実に即したものとは言い難い。すなわち2006年から07年度に行われた調査では、学業について13歳時点で1年遅れている（進級できていない）者は、イタリア人生徒では5%であるのに対し、外国人生徒では43%、2年以上遅れている者も12%おり、さらに18歳時点では1年遅れている者はイタリア人生徒では18%、2年以上遅れている者は8%であるのに対し、外国人生徒ではそれぞれ31%、51%にのぼる（Dalla Zuanna 2009: 127）。その内訳を6歳から18歳の調査対象年齢全体でみていくと、イタリアにやってきた年齢が低いほど、進級できない者の割合は減るが（10歳以上で来伊した生徒では1年以上遅れる者の割合が70%を越えるのに対し、外国にルーツをもつイタリア生まれの生徒では10%代中盤にとどまる）、6歳から18歳のイタリア人生徒の平均が10%に満たないのと比較すると、明らかな差が存在している（Dalla Zuanna 2009: 127）。外国人生徒は、宿題の手伝いといった家族のサポートを受ける割合もイタリア人生徒に比べると低く、「学校の勉強をうまくやっている」と答える者の割合も、イタリア人生徒よりも低い（Dalla Zuanna 2009: 120）。こうした状況に照らすと、MEIの解説パネルで示される、移民第二世代の生徒とイタリア人生徒には「差がない」との認識は、実態とは乖離したものといえよう。

また、MEIは外国にわたった過去の移民を今現在想起することがいかなる意味をもつのかという問題を抱えてもいる。送り出し移民を想起し、彼らをイタリアのナショナル・アイデンティティの構成要素とみなすというMEIの姿勢は、国籍にはこだわらず、イタリア人の子孫という血統によって、ある人々を「イタリア人」とみなすという方向性と軌を一にする面もある。国籍に関して血統主義をとってきたイタリアだが、移民の定住が進み、第二世代も成長していくなかで、近年は国籍に関する出生地主義が例外的ケースながらも採用され、移民二世の国籍取得申請を現行の18歳から引き下げる案も出されるなど、その本格的導入が視野に入りつつある。「血統」上イタリア外にルーツをもつ人がイタリア国籍を取得するという状況は、今後ますます加速していくと考えられる。

それに対し、かつての送り出し移民をイタリアのナショナル・アイデンティティの構成要素とみなし、国籍とは別にイタリア人移民の子孫を「イタリア人」というナショナルな共同性の内において理解するというMEIのあり方は、イタリア国籍を取得していても、ルーツは外国にある人々を、「イタリア人」というナショナルな共同性の外におくあり方と表裏一体の危うさをもつ。血統と国籍が重ならないケースがまとまった規模で生じてくるとき、イタリアのネーション理解、ナショナル・アイデンティティはどのように変化していくのか。イタリアを離れた移民をナショナルな共同性の枠内におき、価値づける展示と、人物写真のパネルが並ぶ、それまでの展示とは異なった趣向のMEIの最後の展示とのコントラスト、それが醸し出すおさまりの悪さは、統一150周年という時期に、イタリアというネーションをめぐる新たな課題に直面しつつあったイタリアのとまどいを反映しているようにもみえる。

註

- 1 イタリアでのネーション理解をめぐり、パトリアルカは、イタリアでは統一以来、産業化の遅れや「家族主義」などに代表される「欠陥」が、先天的な「ナショナル・キャラクター」として析出されてきたとする(Patriarca 2001: 300, 307-308)。また、ジェンティーレは、イタリア社会におけるネーションやナショナル・アイデンティティをめぐる議論の展開を1910年前後からの約50年を対象に検討した『偉大なるイタリア——20世紀におけるネーションの神話の興隆と衰退』（1997年／本稿では2006年にLaterza社から再刊された版を参照）で、イタリアではネーションの「分裂」というモチーフが、多様な担い手によりその時々で「北と南」、「法定の国と実定の国」、「生産的なイタリアと官吏的なイタリア」など内容を異にしながらも繰り返し登場することを指摘し、そうした背景のもとナショナルなアイデンティティの普及が不十分だと認識され、そのことが克服すべき課題として議論されてきたことを明らかにした。ジェンティーレ自身も、結論部分で、（統一100周年の1961年前後には）「イタリア人の支配的価値観の星座において、ネーションの神話の位置はますます周辺的なものとなった」、「ネーションの神話はイタリア人の市民意識から消滅しつつあった」としているが（Gentile 2006: 407）、前者の指摘は、イタリアのナショナル・アイデンティティが、その不在を絶えず想起されることでむしろ存在してきたことを示唆するものといえよう。
- 2 ヴィットリアーノはファシズム期の1930年代に建設された約600メートルのフォーリ・インペリアーリ通りによって、古代ローマの政治の中心地フォロ・ロマーノの脇を抜け、同じく古代ローマの遺構コロッセオと一直線で結ばれている。またコロッセオ方面を背に、ヴィットリアーノから北東へ直線距離で約500メートル先には、現在は大統領府のクイリナーレ宮殿（16世紀からは教皇の居宅、19世紀半ばのイタリア統一後はサヴォイア家の王宮であった）が位置する。この区域がもつ象徴的な意味は、古代ローマから現代の共和制イタリアが（クイリナーレ宮殿は間の建物にさえぎられ直接見えるわけではないが）ほぼ一直線につながるという立地にもよる。ヴィットリアーノ建設にいたる経緯やその後の展開については（藤澤 1997）に詳しい。なお共和国記念日は、ファシズム後の国民投票を経てイタリアが王国から共和国になったことに由来する祝日で、この日に行われるパレードで空軍の飛行チームがイタリア国旗の三色を描くのもフォロ・ロマーノからヴィットリアーノ上空である。
- 3 Commissione Europea, 2009, EUROBAROMETER 71 Public Opinion in the European Unionより。欧州委員会HP参照（<http://ec.europa.eu/COMMFrontOffice/PublicOpinion/index.cfm/Survey/getSurveyDetail/instruments/STANDARD/yearFrom/1973/surveyKy/829>）。
- 4 ニュースレター「イタリアとのネットワーク」は、各号8ページ程度で、在外イタリア人関連の制度に関する告知や解説、在外イタリア人団体のトップやイタリアにゆかりの国々の大使等へのインタビュー、発行元の外務省在外イタリア人・移民政策局の活動に関する情報などを掲載していたが、2009年には刊行頻度が月1回から隔月に減り、2011年末で発行を休止した。各号の内容は外務省HP参照（http://www.esteri.it/mae/it/italiani_nel_mondo/archivionewsletter_inreteconitalia.html）。
- 5 UNESCOとIOM（国際移住機関）は、国際的な協力、統合やインターカルチュラルな対話の促進という目的のもと、各国の移民

博物館間のネットワーク構築を支援している。

- 6 入館料無料のMEIの来館者数の正確さについては疑問の余地があるが、平日でも来館者が途切れることはあまりなく、それなりの人数は入館している様子で、児童生徒の学外見学のコースとしての利用もみられる。近年は観光地化が進むヴィットリアーノだが、1980年代には老朽化が進み館内の一般公開もほぼ中止されていた。施設の人気も低調で、1979年には館内のリソルジメント中央博物館も一時閉鎖になっていたという。ヴィットリアーノの歴史的展開については、(Troilo 2011) を参照。
- 7 ヴィットリアーノの老朽化や展示スペースが限られていることにより、MEIを移転する案もある。実際、2015年現在、ある程度まとまった降雨があると、MEIの展示スペースの一部が雨漏りし、展示ケースをビニールシートで覆う応急処置でしのいでいる現状もある。
- 8 原著、イタリア語版ともMEIの開館の翌年の2010年に刊行。イタリア語版には、「1893年エーグモルト：我々が仕事を盗んでいたとき」の副題が付されている。
- 9 ダンテ・アリギエーリ協会 (Società di Dante Alighieri) は、知識人グループにより1889年に設立された、未回収地回復運動 (irredentismo / オーストリア統治下のイタリア半島北東部アルト・アディジェとヴェネツィア・ジュリアを本来イタリア王国に含まれるべき地とし、その「回収」を求めた運動) を起源とする団体。同協会東京支部HPによれば、現在は世界約150か国に支部をもち、「海外で暮らすイタリア人が母国との精神的なつながりを深めること」、「外国人のイタリア文化に対する関心を育むこと」を目的として掲げる。(http://www.ilcentro.net/dante/organizzazione/dante.html)。
- 10 展示では、1928年から2000年までに制作されたイタリア人やイタリア移民が登場する1057本のアメリカ映画のうち、40%はイタリア人やイタリア移民が犯罪絡み、73%はネガティブなイメージで描かれていると解説されている。また20世紀末のニューヨークの警官によるという「アメリカはイタリアの犯罪者の約束の地」という発言も紹介されている。
- 11 従来の労働移民とは異なったタイプの、留学の増加も含むいわゆる「頭脳流出 (fuga di cervelli)」はイタリアでも1990年代以降話題になっている。2014年には直近10年で初めて国外転出者が10万人 (男性56%・女性44% / 2013年は9.4万人) を超えた。
- 12 イタリアの移民政策に関しては別稿 (秦泉寺 2010) で論じた。より長期的な視野からの検証に関しては (Einaudi 2007) 参照。
- 13 MEIのカatalogには、このコンテストが2009年に開催されたことに加え、4枚の写真に関し簡潔な説明が添えられている。
- 14 Commissione Europea, 2009, EUROBAROMETRO 71 Opinione pubblica nell' Unione Europea: Rapporto Nazionale Italia より。欧州委員会HP参照 (http://ec.europa.eu/COMFrontOffice/PublicOpinion/index.cfm/Survey/getSurveyDetail/)。

文献

- Dalla Zuanna, G., Farina, P., Strozza, S., 2009, *Nuovi italiani: I giovani immigrati cambieranno il nostro paese?*, Bologna: il Mulino.
- Einaudi, Luca, 2007, *Le politiche dell'immigrazione in Italia dall' Unità a oggi*, Roma-Bari Laterza.
- 藤澤房俊 1997 『大理石の祖国 —— 近代イタリアの国民形成』 筑摩書房。
- Gentile, Emilio, 1997, *La grande Italia: Ascesa e declino del mito della nazione nel XX secolo*, Milano: Mondadori.
- , 2010, *Né stato né nazione. Italiani senza meta*, Roma-Bari: Laterza.
- Ginsborg, Paul, 2010, *Salviamo l'Italia*, Torino: Einaudi.
- Ministero degli Affari esteri, 2009, *Museo Nazionale Emigrazione Italiana*, Roma: Gangemi.
- Noiriel, Gérard, 2010, *Il massacro degli italiani: Aigues-Mortes, 1893 Quando il lavoro lo rubavamo noi*, Milano: Tropea.
- Patriarca, Silvana, 2001, "National Identity or National Character? New Vocabularies and Old Paradigms", in Ascoli, Albert Russell, von Hennebery, Krystyna, *Making and Remaking Italy: The Cultivation of National Identity around the Risorgimento*, Oxford: Berg.
- Prencipe, Lorenzo, 2013, "Come nasce il Museo nazionale dell'Emigrazione Italiana. Una breve storia del MEI", in *« Studi Emigrazione/Migration studies »*, L., n.192.
- 秦泉寺友紀 2010 「イタリアにおける移民をめぐる諸論点」『和洋女子大学紀要』第50号, pp151-162.
- Troilo, Matteo, 2011, 'I 100 anni del Vittoriano: Da luogo della memoria a luogo turistico', in *Storicamente 7*.

秦泉寺友紀（和洋女子大学 人文社会科学系 准教授）

（2015年10月6日受理）